雜纂

馬鳴信仰と養蠶機織

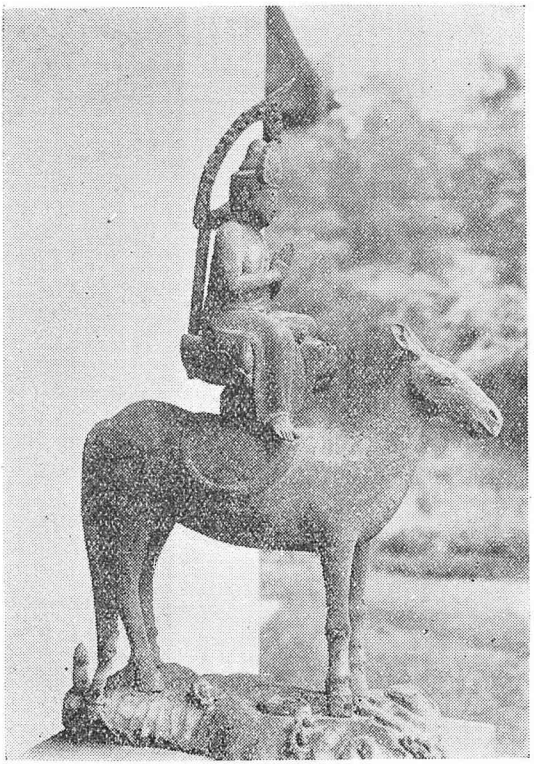
橋川　正

一

楓若葉が夢のやうに煙る四月の盡日に私は久しぶりで太秦廣隆寺を訪れた。靜岡縣史編纂主任足立鍬太郎氏の依頼によつて、同寺靈寶館に陳列されてゐる木造馬鳴菩薩像を撮影するためである。同像は先年奈良の飛鳥園で寫した廣隆寺大鏡にも收められず、同寺でも未だ嘗て一度も寫眞にとつたことがないといふ程、これまで注意に上らずにゐたものである。私も數年前太秦廣隆寺史を編纂した際、全く看過してゐたが、此度足立氏の注意によつて仔細に觀察する機會を得たことをよろこぶと共に、寺史編纂の責任上、默して止まれぬからこの小篇を起稿することゝした。

先づ初めに馬鳴像の由來、丈量について述べねばならぬ。同像は現在靈寶館西側の硝子棚の中に安置されてゐるが、もとは同寺の太秦殿の中にあつたといふ。太秦殿は聖靈殿の前に西向にある一棟の小さい建造物でいはゞ秦氏の靈屋ともいふべきものである。そこには吳織漢織の像と共に秦川勝や弓月王の像が祀られてゐた。それらは亦靈寶

館の東側に陳べられてゐる。馬鳴像がもとこれらの諸像と共に祀られてゐたことを先づ前提として含んでおかねばならぬ。



馬鳴像寫眞（右側）

全高二尺四寸、而して馬背の高さは前部で一尺二分、後部で一尺八分あつて、馬は全體の約二分の一の大きさである。而してその馬の彫刻は單に菩薩像に附隨的に作られたものではなく、相當に秀れた作で、これだけ離して見ても藝術的作品として取扱ふことが出來る。前脚は左右共に揃へてゐるが後脚は右を少し踏み出して變化を示し、殊に頭部の眼のあたりは寫實的に出來てゐて、決して凡作ではない。

馬背の上には織物樣のものを懸けた相を浮彫りとし、その上に敷茄子があつて、五遍菩魚鱗式の蓮華座を載せ、菩薩像は寶冠を頂き、合掌をなし右足を下に垂れた半跏像である。而して光背は雲文樣浮彫の圓輪で、これを支柱によつて支へ

馬鳴像は馬上合掌半跏像で、馬の乘つてゐる臺座は紛れもなく雲を現はしてゐる。この臺座とも

てゐる。像は頭部の頂から半跏の爪先に至るまで約一尺、頭部は寶冠共二寸八分ある。以上の如き比較的小像であるから。もとより身首のモデリングや衣文について微細な技巧を現はしてはゐないが、端嚴な形相を備へ崇高な印象を與へる點に於て菩薩像としての價値を有し、その製作年代を徵すべき銘記或は附隨した記錄はないけれども、作風の上からは鎌倉時代を降らぬものと思はれる。然しこれが寺傳にいふが如く果して馬鳴の像であるか否かについては密敎の儀軌を顧みる必要がある。

二

阿娑縛抄第百十四を見ると、馬鳴に關する圖像及び記事を載せ、經軌として金剛智譯の馬鳴菩薩儀軌一卷と不空譯の馬鳴菩薩念誦一卷とを引いてゐる。前者は詳しくは馬鳴菩薩大神力無比驗法念誦儀軌といひ、その中に「畫作菩薩像色相白肉色

而合掌、坐白蓮花、乘白馬着白色衣、以瓔珞莊嚴身首、戴華冠、垂右足」といひ、後者は詳しくは馬鳴菩薩成就悉地念誦と稱し、「吉備大臣將來」と題名の下に記す所からいふと、古來吉備眞備によつてわが國に將來されたと解されたことが判る。果してそれが事實であるか否かは明かにし難いがその中に「畫作菩薩像、其形六臂又二臂、色紅蓮花、白馬爲座、圍繞六大使者」とある。かくの如く兩者多少相異するが、金剛智譯の軌と本像とは極めてよく一致する。たゞ瓔珞を以て身首を莊嚴するといふ點だけ、像には缺けてゐるが、これは小像であるから省略したのであらう。而して白肉色白蓮花、白馬、白色衣といふ色彩は現在判明し難くなつてゐるが、もと着色のあつた痕は明かに殘つてゐる。但し蓮華の瓣には綠青を塗りこれに金泥で脈線を施した痕があつて、軌と違ふが、不空譯の軌には紅蓮花ともいふのであるから、蓮華は

必ずしも白色に限られず、青蓮華のこともあつたのではなからうか。何れにしてもこの像が馬鳴であることは儀軌に照して疑ひがない。阿娑縛抄には永嚴抄(卽ち永嚴圖像抄)これを圖すとて、雲上に六人の使者を從へた六臂の馬上半跏像を載せてゐる。六臂の像は不空の軌に見えてゐるからそれに基くのである。永嚴圖像抄の馬鳴像は大日本史料第六編之十七に玻璃版にして收められてゐるが阿娑縛抄の原據は卽ちこれで、馬鳴を中心にして蠶室、蠶母、蠶命、蠶印等の六人の眷屬を描いてゐる。權田雷斧氏編の佛像新集第二五四圖の馬鳴像も圖像抄の複寫である。

永嚴抄、阿娑縛抄の圖では馬鳴は左足を垂れ、光背は圓輪ではあるが、雲文樣ではなく、圓輪の上部と左右との三處に火燄を附け本像とは少し異るが、特に左足を垂れてゐる點に留意せねばならぬ、金剛智の軌には明かに右足を垂るとしてゐるのに、何故圖ではこれを誤つて左足としたのであらうか。その理由は明かでないが、思惟半跏像の遺風を留めたのではないかと思ふ。濱田耕作博士の中宮寺の如意輪觀音像の樣式(百濟觀音所收)に說かれてゐるやうに、半跏思惟的の形相は「右利きの人類の通性として右手を以て頰を持した右肱を支へる必要上右足を屈する樣式が普通のものとなつた」のである。卽ち左足を垂れる形相が通例となつたのである。馬鳴像は合掌をしてゐるからもとより手との釣合を顧慮する必要がないにも拘らず無意識的に半跏思惟像の形相を襲用してかくの如く圖したのではなからうか。

三

この小篇に於いて私は歷史的人物としての馬鳴について述べる考へはもたぬ。暫く歷史上の馬鳴とは切り離して、如何なる動機から又如何なる理由で馬鳴が信仰され、本像の如きが作られるに至

つたかといふ點、卽ち信仰の對象としての馬鳴を檢討して見たいのである。阿娑縛抄には寶林傳なるものを引いて、昔天竺の境に一馬國あつて人皆毛を生じ、聲は悉く馬の如くであつた。馬鳴が曾て蠶虫を作つたが、かの國から出た口より絲を出だし人をして衣を作らしめたといふ說話を載せ、第一にこの法を修すべき事と標して「諸國蠶養料尤大要也云々」といふ。のみならず六人眷屬の名には前記の如く蠶に關係深いものがあり、馬鳴菩薩供養法と養蠶との間に離るべからざる連絡がある。更に不空の執には國土萬物枯盡し、五穀豐かならず、又蠶子生ぜず、錦繡財綿乏少の時、年中三箇月この法を修行せよといふ。その年中三箇月とは三月三日、五月五日、九月九日から起算することになつてゐる。なほその修法の道場に於て「馬鳴菩薩、分形大千、化爲蠶室、口吐綵綿、巡於上界、普音在光、供養感應、福粗无邊」といふ偈頌を用ひた所から見ると（圖像抄、阿娑縛抄）、馬鳴の信仰と養蠶とが緊密に結びついたことが愈認められる。

靜岡縣安倍郡服織村大字建穗字山內に鎭座する鄕社建穗（たけほ）神社は、現在天照皇大御神を祭神とするが、もと馬鳴明神と稱し、創立年代は未詳であるが、延喜式神名帳に載せられ、建穗寺の鎭守として崇められてゐた。この神社の文獻に見えるのは承元四年十一月二十四日、將軍實朝が劒を駿河國建穗寺の鎭守馬鳴大明神に納めて治平を祈つたといふ吾妻鏡の記事を先づ擧げねばならぬ。

二十四日、駿河國建福寺鎭守馬鳴大明神、去二十一日卯尅託少兒、酉歲可合戰之由云々、別當神主等注進之今日到來、相州披露之、仍可有御占歟之由、廣元朝臣雖申行之、將軍家彼二十一日曉夢合戰事、得其告非虛夢歟、此上不可及占云々、被進御劒於彼社云々。

こゝに建福寺とあるのは建穗寺の音をタケフデ

ラに訛つたからではなからうかといふのが大日本地名辭書の說であるが、大日本史料第四編之十には吾妻鏡を引いて福の字の傍に穗の字を添へ、建福寺が建穗寺と同一なることを示してゐる。何れにしても同寺なることについて疑を容れる餘地はないであらう。從つてその鎭守馬鳴神社なることも知られる。何時頃から馬鳴大明神の稱があるのかその起源は明かでないが、鎌倉時代にはその名で通つてゐたのである。又慕景集には嘉吉元年五月、駿河の府(靜岡市)に至つて「惣社やしろ雷宮建穗の馬鳴のやしろなどにこゝろざしのぬさ手向侍りてよみ侍りける」と前書した和歌を載せてゐる。この慕景集が太田道灌の家集であるか否かについては異論があるにしても、室町時代の史料として用ふるには無難であらう。これに「建穗の馬鳴のやしろ」といふのが、建穗神社を指すことは明かである。但し群書類從本も續國歌大觀本も馬鳴を高嶋と誤つてゐる。これは馬鳴の草書が高嶋と讀み誤られたからであるが、馬鳴なる名は普通に餘り用ひられぬ語であるから、高嶋と讀まれたのも無理はない。但し明治神社誌料に引く慕景集には正しくこれを馬鳴としてゐる。

この社について、伴信友の考證には「安倍川ノ上藁科川の丘山枯森ノ邊ニアリ、今馬鳴明神ト稱シテ建穗寺ノ鎭守トナル」と註し、駿河記の「馬鳴明神社、服織庄建穗、在建穗寺內」を引く。特選神名牒には建穗神社に「稱馬鳴大明神」と註し「今按古社地は隣村羽鳥村の西南田疇に明神森と云あり。又鳥居跡の巨石もあり、大鳥居と云字も存れりと云り。されば古へは羽鳥村の邊をかけて建穗村と云りしにやあらん。姑附て考に備ふ」といふこの羽鳥村は現在服織村の大字となつてゐるが、羽鳥が機織の宛字なることは疑ひなく、地名から考へると、同社が機織と關係を有し、上代

に於ける機織部の分布を物語つてゐるやうである。この神社に於て神佛習合の行はれた場合に養蠶機織と關係深い馬鳴と結びついたと判せられる。かくして馬鳴大明神と稱せられるに至つたのであらうが、畢竟馬鳴信仰の實例に備へることが出來る。足立氏の書信によると同社には「馬鳴の像はなく、高さ一尺八分の雨寶童子だけを藏し」てゐるといふ。たとひ馬鳴の像は傳へられなくても、その根柢となつた思想信仰の跡は明かである。

なほ岐阜縣可兒郡帷子村大字帷子の藥王寺（天台宗山門派末）に古來祕佛の木造馬鳴像を傳へると聞くが、この像も養蠶機織の業に從ふ人々の信仰を集めてゐるといふ。まだ親しく調査研究してゐないから、事實の保證は出來かねるが、いふが如くであれば、是亦馬鳴信仰の一例とせねばならぬ。加藤咄堂氏の民間信仰史には保食神と蠶との關係についての記述を見るが、馬鳴と蠶との關係

は全く看過されてゐる。然し建穗神社について見ても、既に鎌倉時代に馬鳴信仰のあつたことを示すが、廣隆寺の馬鳴像が秦氏の祖像さては吳織漢織の像等と共に太秦殿に安置されてゐたことは、馬鳴信仰と養蠶機織とが結合してゐたことを證する。廣隆寺は鎌倉時代に復興の機運に赴いたが、この馬鳴像もその當時に製作安置されたのであらう。

四

馬鳴信仰の內容が右の如くであるとして、次に然らば馬鳴信仰が何故に養蠶機織と結合したのであらうかを究めねばならぬ。勿論歷史上の馬鳴の傳記について見ても、それと思しき理由原因を見出すことは出來ぬ。賴吒和羅（ライタワラ）の妙曲を作つて社會人心に感動を與へた事蹟よりいへば、むしろ戲曲音樂に結びつきさうであるのに、殆んど緣もゆかりもない養蠶機織に結びついてゐる。私は手近な

ものではあるが、村瀨栲亭の藝苑日涉を開いてゐる裡に、その卷六に正月の春駒が蠶神を禱るためであるといふ記事に注意した。栲亭は馬と蠶との關係を說明すべく後漢志、通雅、搜神記、鼠璞、廣東新語等の漢籍を引き、支那の民俗にその起源を求めて材料を提供してゐる。これを手引として搜神記卷十四の女化蠶といふ條を見ると、次のやうな記事がある。

舊說太古之時、有大人遠征、家無餘人、唯有一女、牡馬一匹女親養之、窮居幽處、思念其父、乃戲馬曰、爾能爲我迎得父、還吾將嫁汝、馬既承此言、乃絕韁而去徑、至父所父見馬驚喜、因取而乘之、馬望所自來悲鳴不已、父曰此馬無事如此、我家得無有故乎、豳乘以歸、爲畜生有非常之情、故厚加芻養、馬不肯食、每見女出入、輒而怒奮擊如此、非一父怪之、密以問女、女具以告父、必爲是故、父曰勿言恐辱家門、且莫出入於是伏弩射殺之、暴皮于庭、父行女與鄰女、於皮所戲以足蹙之曰、汝是畜生、而欲取人爲婦耶、招此屠剝如何、自苦言未及竟、馬皮蹷然而起、卷女以行、隣女忙怕、不敢救之、走告其父、父還求索、已出失之、後經數日、得於大樹枝間、女及馬皮盡化爲蠶、而績於樹上、其蜃綸理、大異於常蠶、鄰婦取而養之、其收數倍、因名其樹曰桑、桑者喪也、由斯百姓競種之、今世所養是也、言桑蠶者、是古蠶之餘類也、案天官辰爲馬多蠶、書曰月當大火則浴、其種是蠶、與馬同氣也(以下略)

卽ち養蠶の起源を說明する說話で、民俗學的の研究を要するが、馬蠶の結合してゐることは否定出來ぬ。右の搜神記の文は吳の張儼の書いた太古蠶馬記によつて作つたのである。蠶馬記は短篇であるが、此說話に關する搜神記の本文は全く蠶馬記に一致する。然るに南宋の戴埴の鼠璞卷下の蠶馬同本といふ條に同一の說話を引いて、その中に「俗謂蠶神、爲馬明菩薩以此」といふ句がある。馬明の明は鳴と同音であるから誤つたので、これが馬鳴を意味することは疑ひない。さうすれば既

に支那に於て馬鳴が蠶神として信仰されたことは明かである。卽ちこの信仰の起源の年代は明かでないけれども、金剛智や不空の軌が唐代のものとすれば、少くとも中唐の頃にこの信仰は成立してゐたに違ひなく、それが鼠璞にも記載されてゐる譯であるが、この經過を顧みると、元來支那の民俗に於て馬と蠶とが離るべからざる關係のあつた所へ、佛敎の感化が及んで、その馬が馬鳴と結びつき、終に蠶神とされるに至つたのであらう。一體民間信仰は決して合理的には發展しないものであつて、種々の要素が偶然的に結合して、意想外の方向へ轉じて行くが例である。馬鳴信仰の發展も亦その例に洩れず、歷史上の馬鳴とは全く關係なく、單にその名が馬に因めるが故に關係を有するに至つたと思はれる。この信仰が晩くとも鎌倉時代にわが國にも流れてゐたことは、前記の如く吾妻鏡や永嚴圖像抄によつて知られるが、私は

偶〻廣隆寺にある鎌倉時代の製作と推定される木造馬鳴像の存在が知られてわが民衆の精神生活を支配した跡を見る資料を加へたことをよろこぶと同時に、馬鳴信仰の起源を探つて、その養蠶機織と關係の深いことを確かめ、佛敎と養蠶機織大きくいへば佛敎と產業との關係の一面をこゝに見出したことをよろこびとする。

終にこの小篇を草するに當つて足立鍬太郎に負ふ所の少なからぬことに對して感謝の意を表する